

2022(令和4)年度 総合型選抜

2次選考 基礎学力テスト

## 地域創生学群 小論文

### 【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は12時30分から13時30分まで(60分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に4ページあり、解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
6. 受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。このような解答があった場合には採点されないことがあります。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子および下書き用紙は持ち帰ってください。

問題 以下の文章を読んで、日本人が格差の存在を容認するようになった理由を筆者はどう考えているか400字以内でわかりやすく述べよ。

日本人が平等を好まなくなったり、あるいは格差の存在を容認するようになった事実を説明するために、ここでは日本人の心理状況の特色に注目する。すなわち、人びとがどのような心理状態にいることが、平等を忌避したり、格差を容認するようになったかを考察するものである。人間の心理という言葉ではなくて、人間の性格という言葉を用いてもよいが、ここでは心理で統一する。

人間の心理において、決定的に重要な特質は「野心」と「嫉妬心」であると私は考えている。人間はまわりにいる人のなかで生きているのであり、それらまわりにいる他人との比較をして自分の位置を自覚して、何がしかの心理的な感情を持つものである。これらの野心と嫉妬心という感情が、人びとの行動を規定する効果大なのである。わかりやすい表現を用いれば、野心は他人よりも高い位置を望む動機であり、嫉妬心は他人よりも低い位置にいることを妬ましく思う感情である。

たとえば、消費ないし所得という経済変数を考えてみよう。

人びとは他人よりもぜいたくな消費なり高い所得を示すことができれば、優越感を持つことができる。優越感を得るために、人びとは野心を持って勤労に励むとか、いろいろなことで努力をするであろう。このことが経済の活性化に貢献することは間違いない。一方で他人よりも少ない消費なり低い所得しかない人は、劣等感にさいなまれるかもしれないし、他人に嫉妬心を抱く可能性が高い。この嫉妬心がよい方向に働いて、なんとか自分の劣位を挽回しようと何ごとにも努力することは称賛されてよいが、それが逆に悪い方向に働いて、たとえば優位にいる人を落とし入れる行動に出ることは当然のことながら好ましくない。ここで述べたかったことは、もとより野心も嫉妬心も感じない無色透明の人もあるが、人間は多くの場合、野心か嫉妬心を抱くもので、それらが人間に何がしらの行動をうながす動機になるのである。

平等ないし格差との関係で野心や嫉妬心を考えると、平等社会ないし格差のない社会であれば、人びとが嫉妬心を抱く可能性はかなり低くなる。しかし一部の野心のある人は、自分だけ上に立とうとする行動を起こす可能性はある。一方で不平等性が高

い、すなわち格差のある社会であれば、劣位にいる人は嫉妬心からよからぬ行動を取るかもしれない。よからぬ行動とは、たとえば優位にいる人の持つ資産や権益を奪おうとするかもしれない。それが犯罪行為につながれば、社会不安の元凶となりうる。

以上をまとめると、人間が大なり小なり保有している野心や嫉妬心は人間の行動の動機になりうるが、それぞれがよい行動をうながすこともあれば、逆に悪い行動をうながすこともありうる。このことは格差社会のなかにおいても該当することなので、野心や嫉妬心がどういうときにまた、どういう方向に作用するかを見極める必要がある。

(中略)

格差に関する心理学の立場から、ひとつの理論がある。それは池上(2012)によると「システム正当化理論」とされている。それは、弱くて不利な立場にいる人すら、格差を是認することがある、という点を強調することに特徴がある。人間の心理として、現状を維持して肯定しようとする動機が存在するというもので、現行の制度やシステムが長い間存在してきたのであれば、そのこと自体が公正で正当なものであるとみなすにふさわしい、と錯覚することすらありうる。

たとえば心理学からみると、格差あるいは階層の上にいる人にとっては、当然のことながら自分の恵まれた位置は自分の利益と一致するので、それを打破しようという気持ちを持たない。野心を満たしたので満足なのである。あるとすれば階層の下にいる人びとへの罪悪感であろうが、これも下の人びとが強いイデオロギーを持って反抗してこない限り、沈黙していたほうが自分にとって好都合という心理が働くと予想できる。

興味深いのは、格差あるいは階層の下のほうにいる人の心理である。本来ならばそういう人は格差の存在を容認せず、上の人への嫉妬心はあるだろうし、このままではいけないと思う人が多数派であろう。しかしながら、そこで上位にいる人への嫉妬心をむき出しにせずに、すでに述べた「野心」をもってむしろ自分で上位に<sup>上</sup>上がろうとする心理を持つ人もいる。上位にいる人を倒して、それらの人を下位に引き降ろすとか、格差をなくすような行動をとれば社会に不安を与えるだけなので好ましくな

いと思い、格差の存在を容認したうえで自分が努力して上の位置に自分で上ることを希望する人がいるのである。

アメリカでは、所得の低いのはたまたま不運であったとか、自分の努力が足りなかったから、今は恵まれていないだけでそれほど不幸とは感じておらず、自分が頑張っ  
ていつかは高額所得者になろうとする人が、かつては多かった。これこそが格差の存在を容認したうえで、みずから上に這い上がろうとする人がいるという「システム正当化理論」がうまく適合する例である。

アメリカに関しては、ごく最近になって新しい動きが起きた。民主党の大統領候補になるべく予備選挙でサンダース上院議員が「格差是正」を旗印にしてかなり健闘し、とくに若い層を中心にして支持が高かったのである。

「システム正当化理論」におけるもう一つの有力な根拠は、保守主義との関係である。現在のシステムを保持することが、人びとに心理的な<sup>あんねいかん</sup>安寧感を与えるという事実に注目して、人びとが保守的な思想を持つということは、不確実性のあることを好まず、かつ変化を嫌うことを意味する。これは、すなわち現状の肯定なので、世の中に格差の存在することを保守の立場から擁護することにつながる。この解釈を書いた理由は、今の日本でもっとも恵まれない層というのは失業や低所得で苦しむ若者であるのに、今の若者は社会にあまり不満を述べず、政治的に保守化していると思われることを的確に説明できるかもしれないからである。近年のネット上での一部の発言も、その一例かもしれない。先ほどのアメリカにおける若者のサンダース支持とは対極にある。

ジョストというドイツの心理学者を中心にしたグループ（2003）は、外的脅威や不確実性が増大したときは、人びとは保守主義に傾いたり回帰することがあるとした。これも今の若者が先がみえない、きびしい格差社会のなかで保守化している現象に結びつく。

集団的格差の肯定、ということがとくに重要だと思う。たとえば、アメリカにおいては人種の間にはさまざまな偏見や差別が存在して、教育、仕事、収入などに関して格差がある。アメリカのみならずどこの国にも似たような偏見や差別があり、女性と男性の間にも格差がある。これらは人種や性別といったことで区別される集団と考えてよい。

これらの各集団の間に格差の存在することは明らかであり、それはそれぞれの集団に属する人の中でのことなので、自分には責任のない格差であると個々の人びとは思いうかもしれない。すなわち、すべての人がその集団に属する特有の性質を共有していることから格差が発生しているので、個人に非はないと白人や男性という格差社会の上のほうの集団は思うかもしれないし、逆に、黒人や女性という下のほうの集団も同じ思いで、自分の非で格差社会の下のほうにいるのではないと思うかもしれない。

換言すれば、自分と同じく恵まれている集団に属する人や逆に恵まれていない集団に属する人が、他にも多数いるので、別に優越感や劣等感を持つ必要はない、あるいは野心や嫉妬心と無縁であるとしてもよい。この心理的な要因が、集団的格差の肯定につながると考えてよいかもしれない。

(橘木俊詔『新しい幸福論』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)